

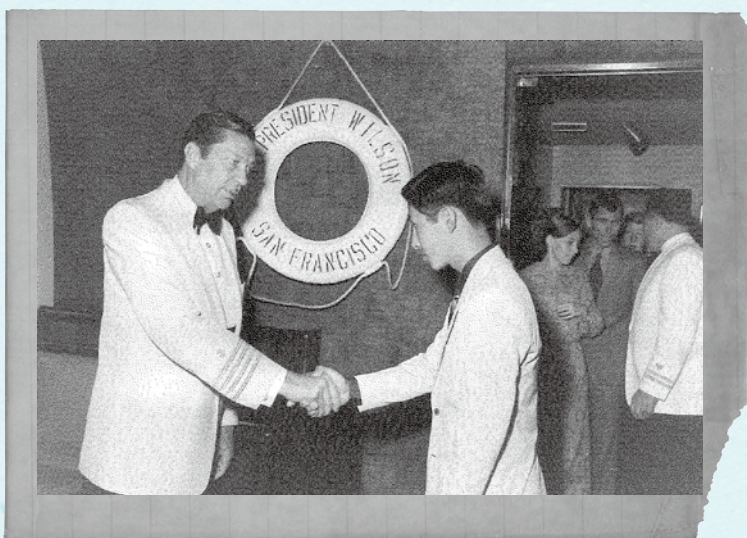


御立 尚資

ポストン コンサルティング グループ
シニア・アドバイザー



船上での緊張感



1972年7月、太平洋航路のプレジデント・ウィルソン号
船上で、キャプテンと握手をする弱冠15歳の小生です。

今見ると「力を抜けよ」と言ってやりたい気がします、
初めての海外への旅、慣れないジャケット・ネクタイ姿でディ
ナー前に、英語でキャプテンに一言挨拶する、という状況。
このときの緊張感は今でも思い出します。

振り返ってみれば、海外とかかわることの多い職業人生の
スタートはここにありました。

神戸市が姉妹都市シアトルに派遣する高校生海外交流団の
選考試験に通るという幸運に恵まれ、約1カ月の米国・カナ
ダ旅行に旅立つことになりました。最初の一步が、英語と海
外の習慣・マナーに慣れるという目的で、船で1週間かけて

ハワイに向かう旅程だった
という次第。

その後、シアトルの高校
各校から選ばれた生徒会
リーダーたちの合宿に紛れ
込み、片言の英語で交流し
ながら、「リーダーシップ」っ
て研修するものなのだ、と
驚愕したり、「少数意見を取
り上げながらも毅然と意思

決定をするために何が大事か」と議論する同世代の米国人高
校生を見て、普段考えていることの彼我の差にただただ唖っ
たり、という日々を過ごさせていただきました。

最初の1週間の船旅で得たものも、いろいろあるのですが、
英語でメニューとワインリストを読む、という経験をさせて
もらい、その後も（リーダーシップ構築よりよほど熱心に）
その方面での能力を磨く癖がついたことは、自分の人生を少
しは豊かにしてくれたように思います。

時代環境が大きく変わった現在でも、思春期に異文化に放
り込まれる、ということの価値は大きいはず。

できる限り、そのような機会を持てる若者が増えるよう
に、社会と企業経営者が支援していければと思います。